

第2章 事例研究

1 友達とかかわり合いながら自分が創る自分の生活（3歳児）

～「着替え」・「母親との連携」を視点到～

徳田 いずみ

・「着替え」を視点到

○1学期 喜んで登園できるように

入園当初は、着替えどころか、手洗いや排泄の始末をするのがやっとの3歳児らである。そんな幼児らに着替えを強いることは、荷が重すぎて、スタートしたばかりの園生活を楽しめなくなってしまう。1学期は、とにかく幼児らが喜んで登園できることを大きな目標とし、「着替え」は着替えたい幼児らだけが着替える程度でよいと考えた。その際の援助もあくまで本人の意欲を重視することに留意した。

事例1-① 「J児ちゃんは、これがいいの～！」

5月20日（火）

J児は、登園するやいなや、着替えテラスにやってきて、運動着を嬉しそうに広げている。ふと見ると自分でトレーナーを脱ぎ、運動着を前後ろ反対に着ている。

教師 「J児ちゃん、運動着反対だよ」

J児 「いいの！」

J児は、脱いだ洋服も床に置いたまま、ロフトテラスの方へ走っていった。降園の時間になった。

教師 「J児ちゃん、帰る時は着てきたお洋服に着替えるんだよ」

J児 「やだ。J児ちゃんはこの服のままがいいの！」

教師 「でも、運動着は幼稚園の中で遊ぶ時に着る服なの。帰る時はエプロンつけるよ」

J児 「やだ！やだもん。J児ちゃんはこれがいいの！やだ～！」

J児は、自分の思いを通し、運動着のまま降園した。

J児には5歳児の兄がいる。5歳児はこの時期から既に運動着に自分で着替えて遊ぶ生活を送っている。また外では4歳児らが運動着を来て走り回っている。視野が少し広がってきてそんな様子が少し見えてきたJ児である。そんなJ児にとって、運動着を着て遊ぶことは、「お兄ちゃんのようにになりたい」というあこがれの気持ちの表れなのだろう。あこがれのものに近づくために着替えることは、J児にとり、ごく自然なことであった。引き出しに入っていた運動着を自分で取り出して着替え、満足気であった。運動着姿のまま帰りたかったJ児にはそのあこがれの姿が嬉しくてしかたなかったことが感じられる。J児のその思いを大事にしてやりたいと思った。

K児が外遊びに行こうと着替えをしている。エプロンのボタン（背面についている）がなかなか外れず、手間取っている。

教師 「K児ちゃん、先生、ボタン取ってあげようか？」

K児 「いや！K児、一人ですの！一人でできるから！」

教師 「ごめんごめん。K児ちゃん、もう一人で取れるようになったの？」

K児 「ちょっと待ってて。K児ね、もうお姉ちゃんだからね」

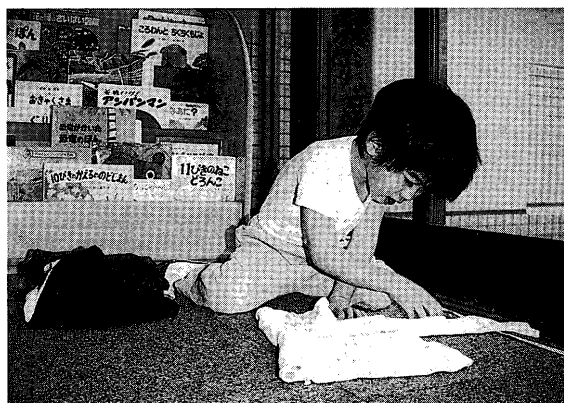
顔を赤くさせながら、ボタンを取り終えた。教師はその様子を黙って見ていた。

K児 「ボタン取れた！K児はもう一人でボタン取れるもんね～！先生、見てた？
エプロンもう畳めるの！見て見て！」

教師 「すごいね。K児ちゃん、できるようになったんだね」

K児はエプロンを広げ、「半分こ～、半分こ～」と歌いながら畳んでいた。

K児は5月あたりから、自分でボタン外しに挑戦している。少しずつできるようになってきたところだった。教師が「取ってあげようか」と言葉かけをしたが、K児は「自分でする」という意欲を見せた。そこで、個の思いを保障してあげようと教師は黙って見守り、K児が自分でできたことを共に喜び認めた。結果的に教師の言葉が、K児の自覚を高めることになった。



プール遊びが始まった。幼児らはパンツもシャツも脱ぎ裸になって水着に着替えている。その中で、K児が水着に着替えようと洋服を脱いでいた。しかし、脱いだものを散らかしていたため、どれが自分の洋服か分からなくなってしまっている。

K児 「先生、K児のパンツとエプロンない！」

教師 「えっ！？う～ん、どこだろう・・・ねえ、B児ちゃん、K児ちゃんのエプロン知らないかな？一緒に探してくれる？」

B児 「先生、B児のエプロンもない！」

教師 「えっ」
A児 「先生、A児のエプロンは？」
教師 「あー！ねえねえ、ちょっと聞いて。あのね、脱いだ洋服をぐちゃぐちゃのままにしていたら、洋服が迷子になっちゃうんだ。洋服は脱いだら一枚ずつ畳んで椅子の上に置いておくの。この椅子はK児ちゃんの洋服のおうちなんだよ」

数日後、一枚ずつ時間はかかっているが、脱いで椅子の上に置く姿が見られた。

プール遊びをするために、着替えが必要になった場面である。多くの幼児がプールに入りたいために一斉に裸になり水着を着ようとした。何枚もの自分の洋服や下着、靴下、みんな同じデザインのエプロンなど、幼児にとってはどれがどれだか分からなくなって当然の場である。ここには3歳児としての育ちが見えてくる。自分なりに着替えの方法を学んできたK児もこの場は、なかなか難しい状況だった。そこで、教師の交通整理が必要と感じた。それぞれの置く場所をもう一度説明し、ルールとして位置づけようとした。「あのね、ぐちゃぐちゃになったら迷子になって困っちゃうから、椅子を洋服のおうちにするよ」と「椅子＝洋服のおうち」と意味づけした。はじめは、なかなかできなかったが、それが、幼児の間にだんだんルールとして位置づくようになっていった。教師が言わなくても自分でシートの周りに並べてある椅子の上に自分の洋服などを重ねておく幼児らが増えていった。



○2学期 着替えを通して考えたりかかわったりする

<着替えの一斉スタート>

9月になって、のびのびフェスティバルをきっかけに一斉に運動着に着替えることにした。2学期になれば、幼児らも園生活に慣れてきて、少し余裕ができてくる。この時期ならば生活のスケジュールの一つに新しく運動着への着替えを取り入れても、幼児の育ちに無理はないだろうと考えた。また、同じ運動着に着替えることで幼児の集団欲や仲間意識をかきたて、のびのびフェスティバルという集団で参加する行事とリンクし、幼児らの目が他の友達や異年齢にも向くだろう。そのことが幼児らの行動範囲を広げ、自分の生活に目的をもたせ、より生活を広げていくことにつながるだろうと考えた。

朝から、着替えテラスは大にぎわいである。1学期に自分で着脱がかなりできるようになっているK児は、さっさと着替えて遊びの場へ入っていった。教師の手を借りてようやくエプロンを脱いでいるV児もいる。そのうちL児やH児らが着替え終わり、保育室に出てきた。

L児 「あー、H児ちゃん、おんなじ〜！」

H児 「ほんとー。おんなじ、おんなじ！」

お互いがお互いの運動着姿を指さし、自分の姿を見比べて笑い合っている。そこへ運動着に着替えたB児やA児もやってきた。

B児 「みんな、おんなじ〜〜！あははー」

L児・H児・A児 「みんなおんなじかっこうしてるー！あははは」

友達がみんな同じ運動着姿になったことが、楽しいようだった。

この時期に運動着というユニフォームを取り入れたことは、幼児らの集団欲（大勢の集団の中にいることで安定したい）を満たし、周囲の友達に目を向け始めた幼児が「同じ姿」の友達を仲間として意識づけるきっかけになったと思われる。その仲間意識の芽生えが、この後行われたのびのびフェスティバルの練習や本番の中で、みんなと一緒に踊る、走る、並ぶ、座るなどの活動をすることにより、クラスみんなで一つのことを楽しもうという仲間意識、集団意識がより強くなっていったのではないだろうか。また、同じ姿の集団の中で活動することが楽しくて、逆に安定につながる幼児も多い。

全員着替えが始まり、生活の中に「着替えてから遊ぶ」意識が定着してきた。しかし、中にはまだ、着替えずそのまま遊びに入る幼児もいる。まだ着替えていないM児が教師にきいてきた。

M児 「先生、どうして着替えるの？」

教師 「運動着に着替えると、いろんな遊びができるんだよ」

M児 「う〜ん、M児ちゃんね、お外に行かないの」

教師 「そっかあ。でもお外に行かなくても着替えるんだよ」

M児 「でも、着替えてない子、お部屋にいたよ」

教師 「M児ちゃんは、それどう思うの？」

M児 「う～ん、わからない・・・」

M児はできることなら着替えをしたくない気持ちを教師に訴えていた。

教師 「着替えると、元気に遊べるよ。ここが強くなるの（足や腕や体を指しながら）。それに、ほし組のお姉ちゃんも着替えてるでしょ？」

M児 「うん。お姉ちゃん、着替えてるよ」

教師 「お姉ちゃんみたいに素敵になれるよ。ね？」

M児 「・・・そっか。M児も着替える！」

M児は、トレーナーなど脱ぎにくそうにしながらも、着替えを始めた。

1学期は、砂遊びをする幼児が運動着に着替えていたため、幼児は「着替え＝外遊び」と捉えていたようである。例えば、U児に教師が「着替えようね」と声かけしてもU児が「今日は外に行かないよ」という返事から、そのことが伺える。「着替え」がまだ定着していない9月半ば、朝、カバンと帽子をロッカーにかけると、そのまま自分の遊びを始める幼児が何人もいた。M児はそんな姿を見て、自分も外遊びをするつもりはないのに何故着替えるのか？とふと疑問をもったようである。これはM児にとっての大問題である。着替えの意味をM児なりにとらえる一つのチャンスと言えた。ここでは、教師が、体が強くなること、お姉ちゃんにあこがれをもつM児の意識をくすぐるようなことなどを言って、M児をその気にさせた。しかし、M児が「どうして着替えるの？」と訊いてきた時に、「お姉ちゃんに訊いてごらん」と切り返してやってもよかったのではないか。自分でつくる生活を目指すプロセス上、M児が自分で問題を解決していく場を与えてやればよかったのではないだろうか。

事例1-⑥ 「着替えなきゃ、強くなれないよ」

11月1日（金）

着替えテラスで幼児らが着替えている。

N児「寒いよ～」

エプロンを脱いだN児がつぶやいた。

教師 「そうだね。冷たいね。じゃあ、パーッと着替えよう。シャツのままだと風邪ひいちゃうよ」

N児 「う～ん、でも寒いよ」

L児 「着替えなきゃ、強くなれないよ」

N児 「そうか・・・」

こうつぶやきながら、着替えてN児は外に飛び出していった。

幼児は、「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」に近づくことに強い憧れを抱いている。それは、日頃、「4歳になったんだよ」と得意気に言ってくることや、「かっこいいね」「つよいね」「力持ちだね」という認める言葉かけにうんと反応するからである。日頃、高いところに登ったり、ジャンプしたりして体を動かし、強いものに憧れを抱いているN児もそういう言葉かけに子どもらしく反応する幼児だった。それで、L児の「強くなれないよ」という言葉が胸に響いたようだった。このように、「運動着に着替えること＝いっぱい体を動かして遊ぶ＝強くなる」という意識が幼児らの中に位置づき始めたように感じた。



○3学期 幼児ら自身の力で生活をつくっていくことを目指して

事例1-⑦ 「だって、ぐちゃぐちゃだもん」

1月22日(水)

着替えテラスでQ児、R児、O児、P児など他にも沢山の幼児らが着替えている。

O児 「先生、僕もうボタン外せるし、自分で全部着替えられるんだよ」

教師 「そうね。O児君も上手になったねえ」

そんな会話をしているとP児が言った。

P児 「僕の青いズボン、ない！」

教師 「え？」

見ると、床には誰かの洋服とP児の運動着などが錯綜している。教師はおそらくその中に埋もれているのだろうと思った。

教師 「あら～、どこいっちゃったんだろうね」

Q児 「だって、ぐちゃぐちゃだもん。その中にあるんじゃないの？」

R児 「私、ちゃあんと畳んでるよ。ほら」

P児 「……」

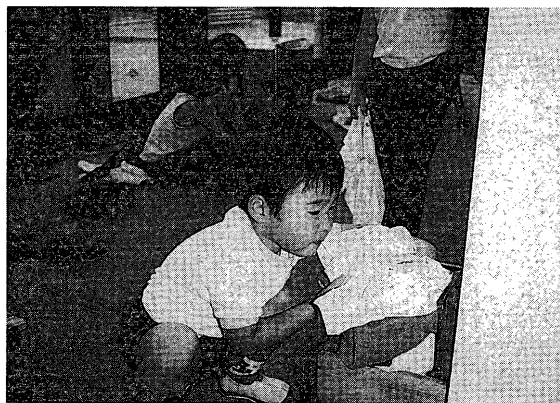
R児がきちんと自分の洋服を畳んでいる様子と自分の様子をP児は一瞬見比べ、ぐちゃぐちゃの服の中を探した。

P児 「あった！」

教師 「よかったね。あつて」

P児は、ほっとした様子で着替えを続けた。

着替えテラスは、一度に大勢の幼児らが着替え始めると、まるでお風呂やさんの脱衣所のような活気に満ち溢れる。着替えを一時入れておく籠などないので、自分の洋服は自分で責任をもって寄せておくか、畳んでおくかしないと、友達と洋服と紛れてしまう。P児が何気なく置いた運動着の上に誰かが脱いだ洋服を重ねて置いてしまい、できた状況だった。Q児はそれを見て当たり前のように言った言葉だったが、P児は無言のうちに、自分とR児の状況を見て、きちんと自分が寄せておかなかったからだと感じ取ったのではないだろうか。幼児同士が交わす言葉で、互いに気づき合っていることが嬉しかった。



事例1-⑧ 「ボタンはずして。一つだけ」

2月19日(木)

着替えテラスは、今日も賑わっている。着脱もだいぶ板についてきた。ただ、エプロンの後ろについているボタン外しだけは、まだできない幼児が何人かいる。

F児がG児に背中を向けて頼んでいる。

F児 「ねえ、ボタンはずして。一つだけ」

G児 「うん」

F児 「G児ちゃんのもやってあげる」

G児 「ありがと」

2人はにこにこしながら、互いのボタン外しを手伝っていた。

F児はクラスで一番遅く生まれた幼児で、着替えをするにも時間がかかる。1、2学期には、教師の手助けを大いに必要としたが、3学期になり、だんだん自分でやりたい気持ちが出てきた。着替えも「自分でできた!」と嬉しそうな顔で教師に言いに来たり、逆に友達のボタン外しを手伝ってあげようとしたりしている。もうすぐ年中さんだということを日頃の教師の言葉からも、少しずつ感じとり始めたようである。教師に頼むのではなく、友達同士で助け合っている姿に成長を感じた。

事例1-⑨ 「ほら、帽子かぶって」

3月12日(水)

テラスで運動着から洋服に着替えている時である。

S児 「ボタンとめられない」

とS児が戸惑っている。見ると、トレーナーにはフードがついており、それが邪魔になってエプロンのボタンがとめられない様子だった。そこに居合わせたT児がずっとS児の後ろへ立った。

T児 「ほら、帽子かぶって」

S児はT児の言われるまま、フードをかぶった。T児は無言で一生懸命ボタンをかけてやっている。この時はボタンが3つともはずれていたの、S児もじっとして3つともかけ終わるのを待った。

教師はこの場面で一瞬手伝おうかと思った。フードが邪魔してとめられないかと思ったからである。しかし、T児が友達の困っている状況を見て、教師が頼んだ訳でもないのに、自分から助けてあげていた。しかも、フードを一度かぶれば、ボタンは留めやすくなるという知恵を使えたことにびっくりした。フードをかぶってカバンをかつぐという動作は、2学期のコートを着てくる時期に何度か経験している。それは、フードをかぶってからの方がカバンのベルトが首に直接当たらずにすむからである。その経験から出た行為だったのかもしれない。経験してきたことを知恵として生かしたT児を頼もしく感ずると共に、この時期の3歳児の姿として嬉しく思った。

<1年を振り返って>～3歳児にとっての着替えとは～

本園では着替えて遊ぶのが習慣となっている。しかし、3歳児の1学期は、新しい環境に慣れることが大切なので、運動着への「着替え」は強制ではなく本人のやる気に任せた。幼児が自由に着替えられる環境とし、周囲の4、5歳児らに目が向き、着替えたい幼児がいれば着替えればよいと考えた(6ページ事例1-①)。2学期になってからの、のびのびフェスティバル(運動会)をきっかけに運動着への「着替え」を一斉にスタートすることにした。運動会では体をいっぱい動かすため、運動着スタイルは適しているということを幼児らに体で感じてほしいと願った。そして、3学期は状況に応じながら着替えられるようにというおおまかな展望で捉えることにした。また、1年が終わる頃にはだいたい着替えられればよいといった長い目で捉えていくのが、3歳児の生活の流れを無理のないものにしていくだろうと考えた。

このような大まかな展望で「着替え」を行ってきたが、実際やってみて見えてきたことがある。

「着替え」は単に着替えるという技術が身に付けばよいというものではないということ、「着替え」を通して3歳児なりに自分達の生活を考えることができるということに教師自身が気づいた。そこで、次の二つの意義が見えてきた。

- a、人間関係(友達と触れ合うこと)、生活づくりに有効である
- b、基本的生活習慣づくりに有効である

つまり、「自分が創る自分の生活」に近づくために「着替え」は一つのアプローチになると考える。そこで、上記の2点と絡めながら事例から見えてきた視点をいくつかあげてみる。

① 教師の言葉かけが幼児の自立を促したり、幼児の考えるきっかけを与えたりする

7ページ事例1-②にあるように、幼児が自分でやるという姿を認める言葉かけが更なる幼児の自覚を促している。「できた!」という気持ち、生活習慣づくりにもつながっていくと思う。また、9ページ事例1-⑤は教師の一言が幼児の考えようとする方向性を示してやることも可能な場面であったと思う。幼児らが自分で行動しようとしたり、考えようとしたりするチャンスが着替えの場に多く含まれている。

② 3歳児なりのルールづくりへ向けての気づきを促す

7ページ事例1-③では、着替えの場におけるルールの必要性に幼児らが気づいていける場面である。ただ、教師が約束事としてルールを押しつけるのではなく、幼児らの気づきを拾って、認め広めていくことを大切にしたい。1学期のこの場面では、教師がよりよい生活に向けてのルールを位置づけてあげようとした。

③ 同じ運動着姿によって集団意識を高める

9ページ事例1-④では、みんなが同じ運動着姿になること自体が、集団欲を満ちし生活を楽しいものにしていく。自分以外の他者の存在にも目が向き、同じ運動着姿での活動を通して、集団意識が芽生え、高まっていった。このようにユニフォームのもつ意味を再確認できる。

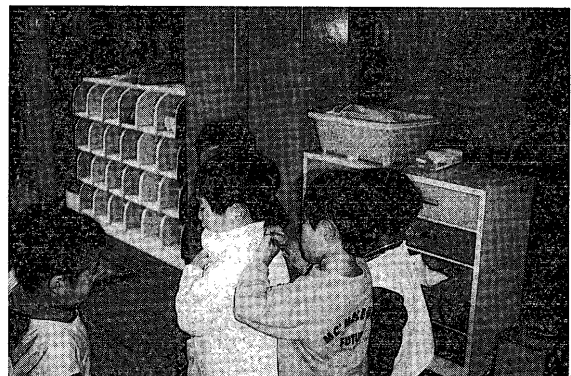
④ あこがれのものに近づくために着替える

10ページ事例1-⑥では、強くなりたいという幼児の思いが感じられる。着替えて遊ぶことが幼児にとって、あこがれのものに近づいているという満足感を与えるのではないだろうか。

⑤ 幼児同士で助け合ったり、モデルとなったりし、人間関係を広げる

12ページ事例1-⑧⑨では、幼児らが教師の手を借りずとも、自分達で互いを助けてあげようとしている。幼児らが自分達で生活をつくっている姿と言えるだろう。11ページ事例1-⑦では、友達の言葉で気づかされ、友達の行為を見て、自分の様子を振り返ろうとしている姿である。どちらも人間関係を広げ、かかわりの場を増やしていつている。

以上のように、3歳児における運動着への「着替え」には、「自分が創る自分の生活」づくりに向けて様々な意味が含まれていると考える。



・「母親との連携」を視点に

事例2-① 「あら！そこ、どうしたの!？」

4月12日（金）

入園式翌日の降園時刻は10時30分。3歳児らは、玄関先で待つ母親のもとへ喜び勇んで帰っていった。そんな中、A児の母親の姿がなかなか見えない。教師はA児と一緒に玄関フロアで手遊びをして待った。A児は至って明るく振る舞って、メソメソする様子もない。

11時近くになって、ようやく母の姿が見えた。どうやら、降園時刻を間違えていたようである。

教師 「あ、A児ちゃん。お母さんだよ！」

我が子と教師の姿を見て、母親は小走りに玄関に入ってきた。そして、A児のスカートの裾が少しめくれていたのを見つけて開口一番、こう言った。

母親 「あら、そこ、どうしたの!？」

咎めるような口調で母親に言われ、A児は、はっとして固くなったようであった。母親に抱きついて甘えたり、泣いてみせたりすることはなかった。

教師 「お母さん、ご苦労様。A児ちゃん、泣かずにまっきましたよ。今日は降園時刻が10時半だったんです。」

母親 「あ、はい。」

教師 「じゃ、A児ちゃん、お母さん来て下さってよかったね。さようなら。」

教師は笑顔で対応したつもりだったが、母親もA児もその表情には固さが感じられた。

遅れて迎えに来たA児の母の姿に教師は、違和感を覚えた。一般的に、遅れて来た場合は、先ずそのことを教師に詫び、待たせてしまってすまなかったという思いで子どもに声をかけるものと思っていたからである。ただ、その時は、送迎に慣れない母親が、遅れたことで気が動転してしまったためかとも思えた。また、待っている時に見せた手遊びをするのはしゃいだA児の様子も不思議だと思った。まだ慣れない筈の幼稚園に教師はいるものの一人残って母親を待つという状況は、幼児にとって相当不安だと思われるのに、そんな雰囲気を感じ取れなかったからである。A児が何か無理をしているように感じた。そして、ようやく迎えに来た母親に甘える様子が無く、表情の固かったA児の姿が気になった。

翌日からのA児の遊びの様子はと言うと、ままごとのスカート、ベール、冠を身にまとい、更におんぶひもでぬいぐるみを背負い、手には買い物バッグを下げ、ベビーカーにぬいぐるみ

を乗せて押して歩くといったありったけの物を使って過ごしている。身を物で固めているような印象を受けた。また、粘土で友達がお団子やへびをつくっているのを真似るなどして遊ぶ場面も見られた。ただ、遊んでいる時の子どもらしい笑顔がA児には見られなかった。何かおどおどし、息が詰まる感じがした。



ある日のA児の連絡帳から

6/10

何度、参観に出ても気がかりなのは座席です。何とかならないのでしょうか。うちの子は左に男の子3人、右に男の子2人にはさまれるように座っていて、うちの子をはさんで左右の子がけんかを始めたり、うちの子はとばかりを受けて、なぐられることが多いみたいで幼稚園はこわい所だと少し思い始めているようで心配です。女の子ですので、顔だけはけがのないよう注意をはらって下さい。あと頭をあまりグーでたたかないように男の子達に教えてください。

7/16

今日は娘が園をこわがって行きたがらなかったのも勿論ですが、私の方が心労がピークに達した為、1日お休みを頂きました。すいません。明日は心配ですが、休み癖がついても困るので行かせようとは思っているのですが、先生お願いします。娘を守って下さい。

母親は娘のことが心配でしかたがなく、何とかしてほしい、でなければ安心して娘を幼稚園に預けられないといったふうに何度か連絡帳で伝えてきたり、この他教師の自宅に電話をかけて、子をもつ親としての不安をどうしたらいいのかといった内容を相談したりしてきた。教師は、この母親の切迫した状況を全面的に受け止めながら、共に頑張っていきましょうと応えた。母親の様子を全面肯定することが母親の心の動揺を鎮める最良の手だてと考えた。

いい天気になり、プール遊びをしたい幼児らが着替えを始めた。そんな中、A児が自分のプールバッグを持ってきて、黙ってH教師の腕に押しつけた。

H教師 「A児ちゃん、何がしたいのかな？」

A児 「・・・・・・・・」

再び黙ってH教師の腕にバッグを押しつけた。

H教師 「プールに入りたいんだね。A児ちゃん。一緒に着替える？」

A児 「うん！」

H教師が援助しA児は着替えを始めた。その後、H教師が他の幼児にかかわっていると、今度はA児はやはり黙って水着をH教師の腕に押しつけてきた。

A児は、まだ言葉より態度や行為で意思表示をするという育ちであることが、上記の事例から読みとれる。このA児の育ちを教師は受け止めながら、安心して言葉が出せる雰囲気づくりに留意することや少しずつ自分の言葉が出てくるように促したり、時には代弁したりして見守りたい。

1学期の個別懇談の日。A児の母親と懇談をした。A児の母親の言いたいことを聞くことで、少しでも不安が和らげばいいと思っていた。

母親 「先生、もう心配でしかたないんです」

教師 「何がそんなに心配なんですか？お母さん。A児ちゃんはY子ちゃんと今仲良く遊んでいて、表情も少しずつ軟らかくなってきましたよ」

母親 「この前も顔に青い痕をつけてました。それに夜中に『こわいー助けてー、おかあさん〜』って寝言言うんですよ。もう本当にかわいそうで・・・・・・・・」

母親は、こう言いながら既に涙ぐんでいる。

母親 「A児が毎日殴られるから幼稚園行くのいやだって、朝、渋るんです。そんな様子見ると辛くて、私はどうしようもしてあげられないし。女の子だから、顔に傷つくってるとかわいそうでしかたないんです」

こんな調子で母親は我が子がやられていること、それが心配でたまらないこと、それを教師が放っていると言いたい様子で興奮気味に話をした。教師はそんな母親の話を頷きながら聞き、懇談の時間はあっという間に過ぎた。この後I教師の所で話を聞いてもらうように伝えたところ、母親はI教師に30分程、自分の思いを聞いてもらったり、I教師の考えを聞いたりしながら、ようやく少し落ち着いたようだった。

懇談翌日のA児連絡帳から

7/17

今日は長々お話を聞いて頂きありがとうございました。私も少し落ち着きました。明日からはもうあと2日ですが頑張って行かせることにします。

2学期、1学期のA児とその母親の様子から、教師はA児をA児にとってのあこがれの存在であろうB児と同じグループにした。A児がもっとのびやかに生活するためには自己表出できるようになること、そのために身近に明るく自己表出をしっかりとるB児のようなモデル的存在がいた方がよいと思ったからである。また、座席を考慮することが母親の安心感を生み、ひいてはA児にもよい影響が出るかと考え、座席をA児が安心して座っていられるような位置に配慮した。そのせいか、A児はB児と一緒に遊ぶことが多くなった。そのB児と共に着替えをしたり、ピクニックごっこをしたり、どこへ行くにもB児の後をついていっている。B児が「今からピクニックにでかけるの!」と言えば、A児も「今からピクニックにでかけるの!」と同じ言葉を同じような口調で笑顔で真似している。B児が新聞シートの上で寝転がれば、A児もまた同じように寝転がって、見ていると可笑しいくらいだった。

集まりの場では、教師の手遊び歌に合わせて、糸を巻き巻き～の歌を歌いながら手を動かし、少しのびやかな様子が見られるようになってきた。

一方、母親は、育友会の園芸サークルで花を植えたり世話をしたりと活動に参加していた。また、お母さん先生になって、年中組や年長組の幼児らに折り紙製作を教えたり、一緒に歌ったり手遊びしたりする活動も行っていた。この頃から、連絡帳などによる訴えは殆ど見られなくなってきた。

したい遊びの時間にA児、C児、D児、E児、F児、G児らが粘土遊びをしていた。そこへH児とI児がやってきた。

H児・I児「まぜて」

C児 「もう、座れないからだめ～」

1枚の粘土シートには5～6人も座ればいっぱいである。H児とI児は顔を見合わせ、どうしようかといった表情である。するとA児が小さな声で言った。

A児 「もう1枚しいたら、いい」

教師 「ん？なあに？A児ちゃん。もう1回言って」

A児 「もう1枚しいたら、いい」

教師にはA児の声が聞き取れたが、他の幼児らには聞き取れなかったと思い、もう1回言ってもらった。A児の言葉が他の幼児にも伝わると、C児も同意した。

C児 「そうだね～」

E児 「もう1枚しいたらいい」

教師 「A児ちゃん、すごいね。いい考えだあ！」

教師も笑顔でそう付け足した。A児はほんの少し嬉しそうにした。H児とI児は早速もう1枚シートを隣に敷いて、にこにこ粘土遊びを始めた。

1学期や2学期のこの時期まで、A児の友達の真似をする言葉しか聞いたことがなかったのに、正直驚いた。A児がその場の状況に応じた言葉を発したことで、自分達で解決できて場が盛り上がり、A児自身も満足して少し自信をつけたに違いない。教師は嬉しく思った。



3学期になって早々の連絡帳から

1/16

ずっと年明け早々遅刻が多くてすみません。1/8のバス32分遅れが最高ですがどうもバスが時間通りに来ないので、申し訳ありません。あと昨日寝言で「先生、助けて。お願いだから男の子の間に入って」と何度も言っていたので何かあったのでしょうか？少し心配です。

1/17

昨日はすみませんでした。先生のことは信用しているのですが、夜中の寝言は怖いものがあったので。考えすぎですね。

3学期が始まり、A児の寝言から母親が久しぶりに連絡帳で伝えてきた。しかしながら、書きぶりは、教師を信頼できなかった1学期の攻撃的なものとは異なり、今の母親のおおらかになってきた心情が読みとれる。それこそ周囲が見えなかったことによる自己表出から、少し見えてきて相手のことも思いやれる自己表現に変わりつつあると感じた。

のびのび表現会に向けての劇遊びや楽器遊びが始まった。A児は楽器をならすことが好きなのである。トライアングルやマラカス、タンブリンなどをピアノの伴奏に合わせて、喜んでならしている。劇では羊のお母さん役になり、セリフをちゃんと覚えて「お母さんはお出かけしますから、お留守番お願いね」とはっきりした声で言っている。

のびのび表現会本番も近づいたある日。遊戯室で練習をしていた3歳児の歌う様子を見たU教師が言った。「3歳の歌、みんななんか固い表情で歌ってるけど、A児ちゃんだけ、すっごくにこにこして歌ってるね」と、こう聞いて、A児は友達とのかかわりの場では、まだ自己表出は十分ではないが、表現活動を通して自己表出する楽しさを感じているのかと教師は思った。

事例2-⑤ 「最初は悩みました」

3月19日(水)

3学期の個別懇談の日。A児の母親は1学期の険しい表情とは打って代わって穏やかな顔つきで懇談の部屋に入ってきた。何だかこの1年の母親の成長がそこにある気がした。

教師 「お母さん。A児ちゃん、当初に比べて表情がほんとはよくなりましたね。何で変わってきたと、思われますか？」

母親 「ええ、まあ、最初は悩みました。でも、お友達のお母さんから、そんなこと大したことじゃないわよって言われて励まされました。特にK児君やS児君のお母さんから言われると、ほんとにそうだなあって感じました。」

教師 「そうですか。お母さん同士で話されてる中で学ばれたんですね。お母さんの捉え方がおおらかになってきてから、A児ちゃん、とっても明るくなってきたと思いますよ。それと、育友会活動、いろいろとご苦労様でした。

どうでしたか?」

母親 「お母さん先生では、年長組さんが『あ、A児ちゃんのお母さん!』って言って、知っていたのでびっくりしました。年中組さんでも、教えたら、折り紙製作を一生懸命やっているのが印象的でした」

教師 「いろいろなお子さんの姿に出会って、きっとお母さん、お子さんを見る目に幅ができたんじゃないですか?きっとそれがA児ちゃんに伝わっていると思います」

こんな感じで話が進んだ。この他、母親はお母さん先生の準備が大変だったこと、やってみてよかったことなど話してくれた。教師からは他に表現会でのA児の姿に成長を感じたことも伝えた。そしてにこやかに懇談を終えた。



このようにして、3歳児の1年間を終えた。新学期になり、A児の母親が下記のように書いてきた。

一人娘のため、初めての集団生活に心配な面もありましたが、先生方の指導を受けて楽しい園生活を送ったようです。新たに加わる園児たちとも楽しく過ごせるようご配慮お願いします。

<一年を振り返って>

A児の4月当初のおどおどした姿を何とかのびやかにしたいと願ってきた。それには、A児に対する直接的な援助と間接的な援助が必要と考えた。また、母親の変容も大きく作用すると思い取り組んできた。そしてA児の姿とA児の母親の姿を通して以下のようなことが見えてきた。

○A児の変容にかかわるポイント

① 教師の援助a (A児に対して) →A児の変容

23ページの図にあるように、教師はA児の思いを代弁したり(17ページ事例2-②)、座席を配慮しあこがれの友達と場を共有しやすいように環境づくりをした。そして、あこがれの友達と同じ言葉を発したり行動したりすることが、A児に自分を表出することの心地よさを体験させていった。また、遊びの場でA児の思いを広め、他の幼児らとの思いの交流を図りながら、A児がより思いを出しやすい場づくりに心がけた。これらがA児をのびやかな姿に近づけていったと思われる。

② 教師の援助 b (A児の母親に対して) → A児の母親の変容

A児の母親は、連絡帳の文面などからも伺えるように不安な気持ちをストレートに教師にぶつけてきた。そのことが教師の母親に対する援助の必要性を明確にしたと言える。教師はその都度、A児の様子についてあまり考え込まないように言葉かけをして、なるべく安心感をもてるように心がけ、母親の気持ちのもち方の変容を期待した。

③ 行事などの体験を通して → A児の変容

A児は歌ったり楽器をならしたりすることに興味を抱いていた。つどいや表現会などの練習を通してA児は表現することの面白さを感じていた。その体験もまたのびやかな姿につながっていったのではないだろうか。

④ 育友会活動のもつ教育力 → A児の母親の変容

幼稚園にはいくつかの保護者によるボランティアサークルがある。この活動に母親が参画することも母親の変容を支えてきたと思う。A児の母親は園芸サークルで園の環境づくりに貢献した。そのことで自分も活躍できているという満足感、達成感が得られたと考える。また「お母さん先生」としての体験が、我が子以外の幼児をみることによる視野の広がり、幅の広がりを生んだ。これらの活動を通して、自己存在感をもつことができたのではないだろうか。それが、M児を捉える目にゆとりを与えたと思う。このような母親の変容がひいては子の変容につながっていったのではないだろうか。

⑤ 友達の親同士のコミュニケーション → A児の母親の変容

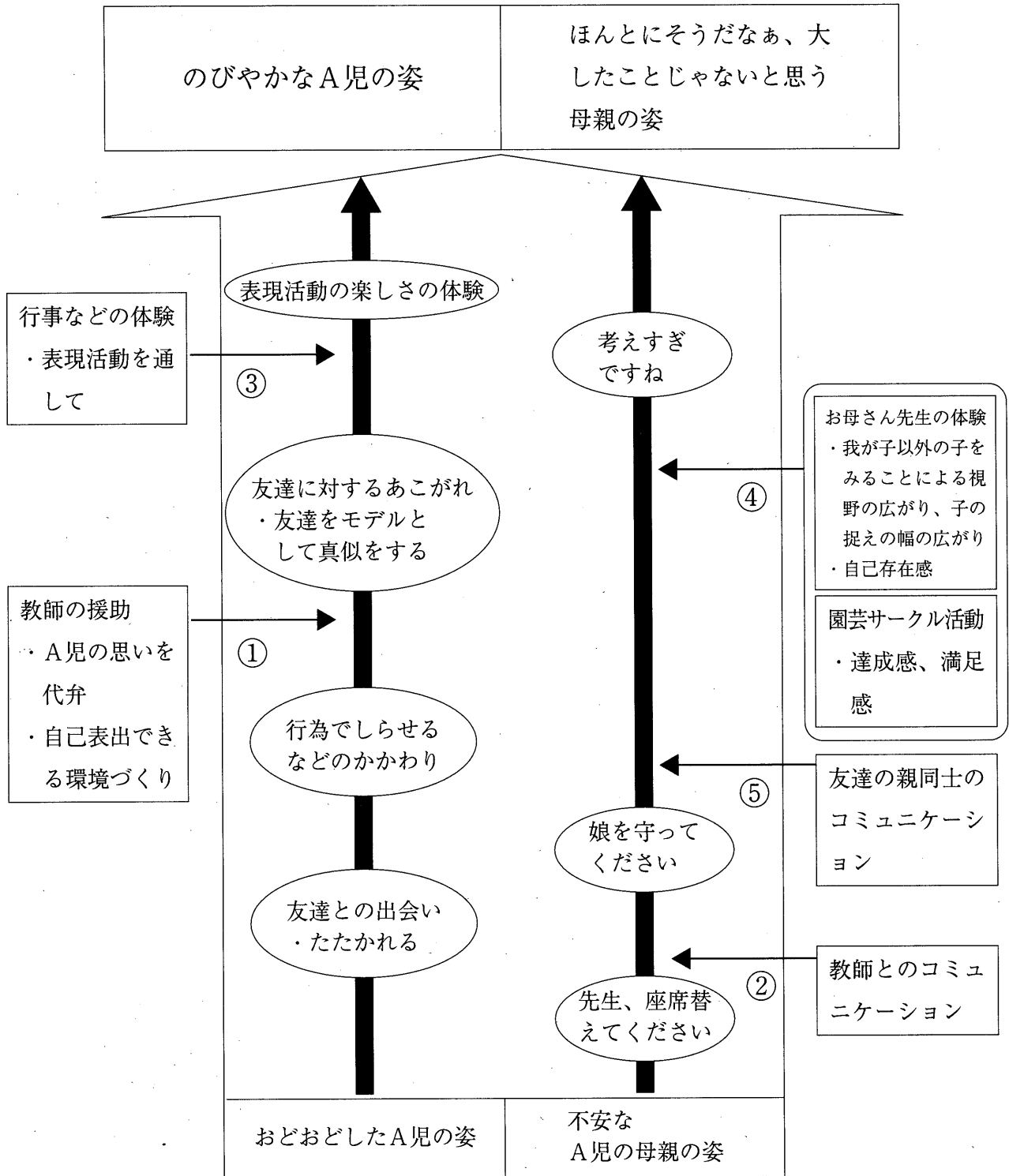
仲の良い友達の母親に「そんなこと大したことじゃないわよ」(20ページ事例2-⑤)などと励まされ、同じ立場の母親同士で思いを共有できたことが、A児の母親にとって心が安定し出来事を前向きに捉えるきっかけになっていた。

以上のように5つのポイントを考えてみた。これらのポイントが親子それぞれの変容にかかわっていき、互いの変容の姿がさらに変容を生んだと思う。母子一体であることを教師自身が捉えて、それぞれに援助を働きかけていく役割の大切さを再認識した。



＜自分が創る自分の生活＞

A児の自分づくりのプロセス



3歳児 生活過程2002 ~自分が創る自分の生活に向けて~

